

七月実施の発掘調査について

七月からは、音楽棟エリアの調査区(24B区)に入っています。この調査区は、今年度の調査区の中で最も広く、多くの調査成果が期待される場所です。この24B区は、校舎建設工事の事情により、三調査区に分けて実施することとなりました。七月は、最も北側の調査区24Ba区の調査を実施しました。

左写真は、近世の整地層(盛土)上面の調査で見つかった遺構群の全体写真です。写真左下には長い柱穴が二列見えます。これは成瀬隼人正中屋敷の絵図面でも確認される建物柱列です。その脇には大型土坑群が確認されています。その中からは、各種陶器・磁器片のほか、身分の高い武士などの宴席で使われた食卓塩である焼塩壺や土人形などが見つかっています。貝殻・魚骨・獣骨片が見つかっている場所は、深く掘ったいくつかのゴミ穴を覆うようにさらに廃棄された場所のようです。付近は整地も兼ねて何度も埋められた可能性が考えられます。

八月にかけて下面の調査に入りますが、調査区北東側(写真左上側)を中心に、黒色粘土層の広がりがあり、これが古墳時代から古代の包含層の可能性が考えられます。保存が良好であれば、当該時期の活動痕跡がこの場所で見つかるかもしれません。

(川添和暁)



24Ba区 全体写真(上が東、体育館側)
【近代整地層上面での遺構掘削状況】

西二葉町遺跡発掘通信

No. 4
令和6年
8月号

残暑お見舞い申し上げます

今年もかなりの猛暑が続いております。みなさま、いかがお過ごしでしょうか?西二葉町遺跡の発掘調査現場では、こまめに休憩を取りながらの作業を続けています。

八月現在、発掘調査は、高校用地内の南側、現在の音楽棟と体育館の間のエリア(24B区)で行っています。管理棟に近い北側から着手しています。七月の調査概要は本誌四頁にて報告させていただいております。また、六月には、高校生に向けて考古学の授業と現場見学を実施させていただく機会をいただきました。この授業については、その後の感想文等をお寄せいただきました。授業を行った我々職員も、高校生の感想を読ませていただき、いろいろな刺激を受けました。詳しくは、本誌の二・三頁をご覧ください。

九月に行われる明和高等学校の文化祭の折に、現在の西二葉町遺跡の発掘調査現場にて説明会を予定しております。成瀬家の家紋の入った軒丸瓦等の出土品も展示いたします。是非、ご参加いただけますようお願いいたします。

(堀木真美子)



土坑群と出土遺物
【上左:焼塩壺、上右:土人形片(三猿)、
下:貝・獣骨が集中して含まれる土坑(南より)】

西二葉町遺跡発掘通信

No. 4
令和6年8月号

編集・発行 公益財団法人愛知県教育・スポーツ振興財団
愛知県埋蔵文化財センター



〒498-0017 愛知県弥富市前ヶ須町野方802の24
電話 (0567)67-4161【管理課】4163【調査課】
ホームページ <http://www.maibun.com>
Facebook <https://www.facebook.com/maibunachi>
Instagram <https://www.instagram.com/aichimaibun/>
X <https://twitter.com/aich>
印刷・協力 安西工業株式会社

明和高等学校での取り組み

この度、明和高等学校の先生方から、考古学についてのお話と遺跡見学を組み合わせた授業の依頼を頂きました。愛知県埋蔵文化財センターとしては、このような大変貴重な機会を頂くことができましたことは光栄で、職場を挙げてこの企画を実施いたしました。

授業は、六月後半から七月初めまでの間に、普通科二年生の全クラスと、三年生の文系クラスを対象に、各一コマずつ実施いたしました。季節柄梅雨ということもあり、現場案内の際に降雨が激しくなって、途中で切り上げざるを得ない場面もありましたが、概ね目的は達成できたのではないかと、考えています。本号では、この授業の内容について特集をいたします。

今回の企画では、考古学や埋蔵文化財調査について、導入部分をごく簡単にご紹介したに過ぎません。これを機会に、生徒さんが自らいろいろ考え、調べたりするきっかけになれば、これに勝る幸せはありません。また、今回の経験を、他研究分野との比較材料に取りあげて頂くことでも、大変ありがたく存じる次第です。



明和高等学校での授業の様子
【上:教室での講義、下:発掘現場での説明】
24Ae区(食堂西隣調査区)
6月19日実施

かわぞえかずあき
(川添和暁)

考古学・埋蔵文化財授業について

明和高等学校からの依頼は、「歴史総合」(二年生)の授業の一環として、発掘現場の見学において資料の扱い方や、文化財保護・考古学について学ぶとともに、「開発と保全」について考える機会にしたい、というものでした。先生のご相談の上、教室での講義と、現場および遺物見学の二部構成で実施しました。

教室内での授業では、①考古学とはどんな学問か、②埋蔵文化財職員になるには、③埋蔵文化財職員の業務(西二葉町遺跡の調査を事例に)、をお話しました。①では、考古学の特性を左上から二番目のスライドのように定義しました。その上で、考古資料は、当時、この場所での人間活動を示す、地中に残された唯一無二の直接的証拠であるから、とても重要であることを述べました。さらに、その証拠を自分たちで見つけ、資料化し、活用できることが、考古学の魅力であることもお伝えした。そうはいいまでも、考古資料は何か難しいというイメージがつきまといまいます。その理由の一つに、ほとんどの場合は、断片的にしか残って

いないという事情を説明し、より有益な情報としてフルに保存・活用するために、遺構・遺物やその出土状況などを、詳細に記録する必要がある、とも述べました。②では、大学で考古学を専攻する道についてお話しするとともに、最近ではいろいろな学問分野の立場から考古学に関わっている事情もお伝えしました。③では、遺跡は本来は現状保存が望ましと言われています。しかし、発掘調査では、調査担当者の所見・評価という濃厚な情報が、記録として保存されるという状況を説明しました。考古学では、このような遺跡・遺物の資料化を行う行為がとても重要であることをお話ししました。物事や事象は、ある評価者を通じて、広く初めて「事実」(もしくはその一案)として認識される、という側面があります。これは、恐らくどのような研究分野にも通じる事情だと思われれます。

教室内での講義後、生徒さんを二つのグループに分けて、現場のご案内と遺物の実見をして頂きました。遺跡見学は24A区の江戸時代の建物跡などをご案内しました。遺物は、24D区で出土した、成瀬家家紋入り丸瓦、犬山焼小皿、常滑焼大甕、旧制中学校舎の棧瓦に見て、触れて頂きました。(川添和暁)

東区 西二葉町遺跡の発掘調査について
—埋蔵文化財調査・保護と 考古学研究の可能性—



「歴史総合」の授業の一環として、発掘現場の見学のなかで資料の扱い方、文化財保護・考古学について学ぶとともに、「開発と保全」について考えたい。

http://www.maiham.com 愛知県埋蔵文化財センター 川添和暁

1-1. 考古学はどんな学問？

遺跡・遺構・遺物から、過去の人間活動や社会を研究する学問

歴史学・人類学の一分野

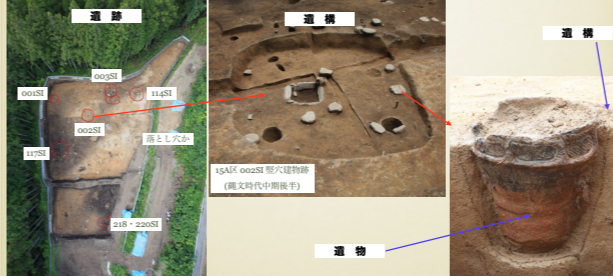
歴史学的側面では、時系列による説明を。人類学的側面では、人間活動の可能性を。

日本史(国史) 東洋史・アジア史 西洋史

考古学はモノ自体を研究対象とする学問

文献史学

遺跡・遺構・遺物の関係



川向東員塚遺跡(仮名称)

遺跡 遺構 遺物

1-3. 埋蔵文化財専門職員の業務 西二葉町遺跡の調査を事例に

北校舎北側調査区(24D区)の経過



1. 現場調査 2. 発掘調査 3. 発掘調査 4. 発掘調査 5. 発掘調査

1-3. 埋蔵文化財専門職員の業務 西二葉町遺跡の調査を事例に

食堂西側調査区(24A区)の経過



1. 現場調査 2. 発掘調査 3. 発掘調査 4. 発掘調査 5. 発掘調査

授業で映写したスライドの一部

生徒さんの感想・気づき

生徒さんからの事後アンケートを拝見することができました。使用に当たり、ご協力頂いた先生・生徒の皆さまに、まづはお礼申し上げます。結果を下表にまとめてみました。これまで発掘現場などを見たことのない生徒さんが圧倒的多数であったようです。そのこともあり、遺跡・遺構・遺物と、学校校内から見つかった実資料を直接見て触れることができた経験がとても印象強く残った様子が、言及項目からも見て取れます。折り返し、いつでも調査の経過を見て頂きますよう、今後も情報を随時発信していきます。

生徒さんの感想・気づき 言及内容一覧表

回答種別【回答生徒数 291名、複数項目への言及は累積でカウント】	言及数 総計(人)	言及率 (人/291)(%)
1 考古学自体についての印象	65	22.34
2 遺跡があるのだという認識・実感	99	34.02
3 発掘調査の特性について(破壊調査、事前準備など)	19	6.52
遺跡の感想(地層、堆積、礎石など、実際の遺物の出土など)	98	33.67
4 空襲跡について	34	11.68
遺物の感想(直接触れるなど)	48	16.49
成瀬家の瓦について	33	11.34
犬山焼について	22	7.56
資料の接合について	6	2.06
5 考古学に関わっている研究者について(文系・理系など)	15	5.15
担当者について(業しそうに説明するなど)	9	3.10
調査範囲や調査区設定について	2	0.69
6 現場調査に関わっている人たち(高齢の方が多いなど)	6	2.06
7 発掘調査の方法(慎重・手作業・土層断面確認)	34	11.68
資料化した記録の活用について	2	0.69
8 発掘調査報告書について	1	0.34
将来・進路について	11	3.78

何となく堅苦しいイメージを持って「考古学」という学問が身近なものなのか、噛み砕いて説明していただけたので、今までよりも身近で、ロマンのある学問なのだと思えました。文学部出身の職員さんもお住まいの話から、文学部志望の私の将来にも考古学と関わる可能性があるのだという気が得られました。なかなか見ることができない発掘現場や遺構・遺跡を見たり、自分の将来の可能性が広がったりする貴重な機会でした。(生徒Aさん)

考古学という学問は、世間離れていたり、縁遠いと思われがちな学問だと思います。その理由はいろいろですが、普段一般の方々が発掘や遺物を意識する機会が少ないこともあるかもしれません。皆さんがお住まいのところでも、実は遺跡は身近にあります。その身近にある資料から当時の歴史や社会を考える学問は、とても直接的で魅力的だと、私は考えています。研究・探究心は普段の気づきの延長だと思えます。それをこの機会にお見せできたのであれば幸いです。(川添和暁)

実際の発掘現場を見ることができて、おもしろかった。現れる遺構を地質や関連する建物など様々な視点から調べていると知って凄いなと思った。特に江戸時代の柱の跡がはつきりと残っていることや、戦中に焼けた土が色の違いで分かることに驚いた。また、旧石器時代の土まがが思っていたよりも浅いことにも驚いた。出土した遺物については、とてもきれいな状態で残っていることが凄いなと思った。そして、人工的に盛られた土と自然に堆積した土の違いの話を聞いて、どのようにして平地に土が堆積していくのか、またその土に遺物が入り込むのはどうしてか疑問に思った。人が生活している土地に土が堆積していつか地層になる仕組みを調べてみたいと思う。(生徒Bさん)

考古学の発掘調査では、まず基本の土層を把握することが重要になります。土層の認識は、色調だけではなく、砂粒の大きさや形などの観察から、それぞれの土層が堆積した状況を想像してゆきます。正確なことが言える場合は少ないですが、土層に含まれている土器や石器などの遺物のほかに、砂粒の堆積状況など自然科学分析の結果など、いろいろな情報を集めて堆積したころの風景を想像します。一つの分析ですべてが判明することはありません。どんな情報を集めて、どんな推論を建てるかが大切です。(堀木真美子)

ついこの前まで、普通に歩いていた場所の下に、あんなに貴重な遺物が眠っていたのだと思うと、とても不思議な感覚になりました。歴史学ではカバーしきれない範囲を物的証拠を基に検証する、考古学のおもしろさを知りました。将来私は、大学の文学部へ進み、歴史学や考古学を学んでいきたいと思っています。その糧になる貴重なお話を、体験を、ありがとうございます。

今回見せていただいたように、なぜ遺構がきれいに出土してくる(わかる)のですか。(生徒Cさん)

考古学のおもしろさをわかってくださり、私たちも嬉しいです。考古学は先人が暮らしの痕跡を研究し、人類一般の過去(歴史)を復元する学問です。なので、どこにでも、というわけではありませんが、みなさんが暮らしている地面の下には多くの遺跡が今でも眠っています。また、人々が生活のために地面を掘り返すと、必ずそこには違った色や手触りの土で埋まります。ですので、人々が暮らした当時の地面まで掘り下げて、丁寧に表面を削ると、その土の違いが見えてきます。(樋上 晃)